シドッティ神父
～江戸の殉教者④～

遠藤周作の「沈黙」のモデルと言われるキアラ神父。彼は同じイエズス会の日本司教代理のフェレイラ神父が穴吊りの拷問で棄教したあと、その汚名を晴らすために10人のイエズス会員の1人として日本に派遣されたことはすでにふれた。

しかし、キアラ神父も捕えられ、「穴吊り」の拷問により「転びバテレン」になる。

江戸幕府の徹底した迫害により、それ以降、密かに来日する宣教師もなかったが、それから23年後の1708年、江戸時代最後の殉教者となるイタリア人のシドッティ神父が日本に密入国を試みる。しかしすぐに屋久島で捕まり、江戸に送られる。

彼は「日本の将軍に会って、キリスト教迫害を止めてもらう」ことを目的に来日したとされている。それまでの殉教者と異なるのは、このシドッティ神父を訊問した「新井白石」との出会いの結果である。

新井白石はシドッティ神父を通し、西洋人のものの考え方を知ろうとし、その記録を「西洋紀聞」として残した。

5月の連休を利用して長女と江戸の殉教者を調べるために上京した際、今も「キリシタン屋敷」と呼ばれる文京区にあるキリシタン屋敷跡を訪ねた。そこで、「江戸キリシタン屋敷跡の石碑」が建つ近くで「シドッティ記念館」を見つけた。

これは民間人の女性がシドッティ神父の生き方に共鳴し、石碑近くに土地を求めて設立したものである。

予告なしに突然訪れたため、館長に会うことは出来なかったが、後日、わざわざ「殉教者シドッティ」と、新井白石が書いた「西洋紀聞」の2冊が送られて来た。

「西洋紀聞」は旧仮名遣いで読みづらいが、大部分は理解出来た。シドッティ神父と新井白石の出会いは、文化を異にする西洋と日本との出会いとも言える。宗教と哲学について両者は一致することはなかったが、地理、天文学、数学などは互いに理解し、2人の間には友愛の美しい感情が生じたようだ。

多分、シドッティ神父が死刑を免れたのは、新井白石の配慮によるものだろう。

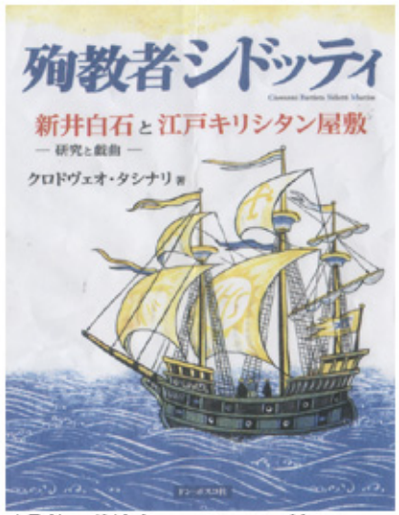
しかし、シドッティ神父の世話をしていた長助とはるの2人がキリスト教の洗礼を受けたことを知るや、暗い地下牢に6年間幽閉され、1714年に病死する。2016年、牢屋跡の発掘調査で3人の人骨が発見され、DNA鑑定の結果、3人の骨だと発表された。

今までの殉教者の迫害と死に比べ、シドッティ神父の場合は、何か人間の温もりが感じられ、2冊の本を読んでいても楽しかった。

さて、話は殉教者とは異なるが、山口県内のNGOネットワークとして「山口NGOネットワーク」がある。現在の会長はIMAYAでベトナムへの支援を続けておられる下松市の特別養護老人ホームほしのさとの岩本功先生だ。

来る23日午前10時半からほしのさとで総会が開かれるが、11時から約1時間の「情報交換サロン」は無料で、一般の方も参加していただける。内容は岩本功氏の「ベトナムについて」と藤屋リカさんの「パレスチナについて」。関心のある方はぜひご参加を。

お問い合わせは083・46・2010の藤屋まで。



江戸最後の殉教者、シドッティ神父について書かれた1冊

新井白石著「西洋紀文」